



TITLE:

蒙文直譯體における白話について：  
元典章おぼえがき 一

AUTHOR(S):

田中, 謙二

---

CITATION:

田中, 謙二. 蒙文直譯體における白話について：元典章おぼえがき 一. 東洋史研究 1961, 19(4): 483-501

ISSUE DATE:

1961-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148196>

RIGHT:

# 蒙文直譯體における白話について

— 元典章おぼえがき 一 —

田 中 謙 二

元典章の文體が複雑な要素より成り、一般の中國文とかなり質を異にすることは、もはや常識であつてよいのに、いまなお必ずしもそうでない。およそ著述や論文で元典章を引用するものには、正常な中國文と同じ平面で讀もうとすることに起因する、ひどい句讀の誤りがつきものである。王曉傳氏の輯録する「元明清三代禁毀小説戲曲資料」（一九五八年七月、作家出版社刊）のごときは、その最もはなはだしい例であらう。

元典章の文體は、一おう二種に分かたれる。一は漢文吏牘體、他は蒙古文直譯體であつて。前者については、吉川幸次郎博士の論文がそなわっているから、ついて見られたい（東方學報第二十四冊「元典章に見えた漢文吏牘の文體」）。つぎに、後者の蒙古文直譯體の部分であるが、周知

のとおり、これは讀者を最も苦しめるものであり、しかもそれらの部分はかなり大きな比重を占めている。元典章がその重要さを認識されながら、現在まで一般にはあまり利用されずに來た原因も、實はこの部分の難解さにあるといつてよからう。ついでに告白するなら、門外漢である筆者が元典章にひかれたゆえんも、實はこれらを主とする白話を用いた部分にあつた。たとえば、中書省官の上奏にこたえた蒙古皇帝の聖旨に、

大都的及這裏的。省部諸衙門裏勾當裏行的。不早聚晚散怠慢呵。打了勾當裏交出者。（典章新集、朝綱、早聚晚散）

大都（の）およびこゝ腹裏、すなわち中書省直轄區一の省・部關係の諸官廳で職務を執るものが、早く出勤しおそく退廳する

ことをせずに怠けたなら、打つて職務より出てゆかせよ。

とあるように、勤務状態のわるい公務員に對しての、「處罰する」という語に代る「打」字に象徵された、この具體性、この生ま生ましきこそ、元典章の魅力なのである。もつとも、右の場合は、原文に用いられる蒙古語自體が素朴で、おそらく「處罰する」という語彙がなかつた——「打つ」がただちに「處罰する」を意味したか——というのが、眞相であるかもしれないが。

もう一つ例を挙げよう。たとえば、ある時中書省官が、中書省を経由せずに上奏して獲得された聖旨の回送に困り、皇帝につぎの如く申し入れた。

……似這般干碍俺的勾當。不揀誰奏呵。教行的時分。俺在根底有。俺根底商量了教行呵。展轉的不頻煩可憐見呵。這言語必關赤每根底說與呵。怎生。（典章四、朝綱、奏事經由中書省）

かようにわたくしどもに關係することを、誰であらうと上奏しました場合、それを實施させたまう時には、わたくしどもがおそばにいますのです、わたくしどもに相談して實施させたまい、まわりまわつてたびたびお上を煩わして思召しを頂戴しないようにし、このお言葉（聖旨をさす）をビセクチャー書記官―たちに申し

わたすようにいたせば、いかがでしよう。

すると、皇帝は回答した。

索甚麼那般般說。必關赤每根底說了。各枝兒裏官人每根底都說與者。但凡這般合干碍俺的勾當。他每休奏者。只教恁奏者。

そんなことなどいうにおよばん。ビセクチャーに申しつけて、各部門の官人らにみな告げよ。およそそのようにその方らに關係すべきことは、かれらに上奏させぬよう。その方たちだけに上奏させるように。

これらの直譯體の表現には、中書省官の皇帝に對するやや非難がましい口吻とか、皇帝の少しく恐縮しているような感情の動きとかが、なんとなく傳えられている。それは主として、前者における「俺在根底有」、後者における「索甚麼那般般說」という、白話なればこそその挿入句にもとづくであろう。もつとも「大元海運記」上のある條に、

上曰。安用如此言。止以朱張二人運之。

という、皇帝のことばが見えるが、その首句も、ケースこそ違ひが、上の「索甚麼那般般說」を文言におきかえたものといえよう。これとても「大元海運記」なればこそ残り得たので、このように細かな感情の動きを傳えるにすぎない

ことばは、正常の文言文ではしばしば切り捨てられがちである。しかも、そういうことばこそ、その會話に血を通わせ、その會話をつつむ空氣や、そのほか附帶的なさまざまのニュアンスを讀者に傳えてくれる。直譯體の部分の魅力は、實にそうした點にある。

ところで、これらの直譯體の部分には、同期の俗語文學をよみなれた眼には少しく異常な白話の語彙乃至表現が含まれている。ここにはそれらの代表的なものの若干をえらび、札記のかたちをかり、それぞれの領域における用法の差違を明らかにしようとおもう。

### 不……那甚麼

元朝の皇帝が道觀寺院に與えた聖旨の白話碑は、周知のごとく、かなり多數殘存するが、その末尾の部分には、みな申しあわせたように「他不怕那甚麼」という表現が見える。たとえば、

更這和尚每道。有聖旨。麼道無體例勾當休做者。做呵。他每不怕那甚麼。（榮陽洞林寺聖旨碑——蔡美彪輯「元代白話碑集錄」收）

また、この僧侶たちは、「聖旨がある」といつて、無法なことをしてはならぬ。すれば、かれらは痛いめにあうぞ。

この表現は白話碑に集中的に現われるが、もちろん典章中にも用例（たとえば典章五、臺綱、整治臺綱）があるし、また類似の構文は、典章・白話碑を通じてつぎの如く指摘せられる。

道人每内中。不喫酒肉無妻男底人。告天者。不是那般底人。喫酒喫肉有妻男呵。仙孔八合識。你不揀擇出來那甚麼。（盤屋重陽萬壽宮聖旨碑——「元代白話碑集錄」收）

道士たちのうち、酒肉を食わず妻子のないものが、天に祈れよ。そうでないもの、酒を飲み肉を食い妻子をもてば、仙孔八合識（蔡美彪氏に説あり、「元代白話碑集錄」三頁を参照せよ）よ、そちが選別すべきである。

那底。俺不是功德主那是麼。（汲縣北極觀懿旨碑、同上）  
それ（上文に列擧された三つの道觀）は、わたしが功德主——施主じやないか（是は甚）。

近據和買草料・起運諸物。雖是官爲支價。其般運脚力。百姓亦是生受。已後怎生可憐見。咱每不識那甚麼。

（典章三十六、兵部、禁使臣條書）

近ごろ、飼料の買付・物資の輸送については、官より代價が支拂われているが、その輸送人夫費で、國民はめいわくしている。今後、どのような手をうつかは、わたしが心得るべきことだ。

如是元騎馬匹不乏。强行奪要頭匹。不有罪過那甚麼。

(同上)

もし、元から乗っている馬が疲弊せぬのに、むりに馬匹を奪えば、罪を構成せずにはすまぬぞ。

さらに、同じ表現は「孝經直解」中にも見える。

這般呵。把自家父母落後了。敬重別人呵。阿的不是別了孝道的勾當那甚麼。(聖治章第九「不愛其親而愛他人者、謂之悖德、不敬其親而敬他人者、謂之悖禮」の注解)

こんな次第だから、自分の父母をそまつにして、他人を大事にすれば、これこそ孝道にそむくことではないか。

這五件若都完備了呵。孝順的勾當不有那甚麼。(紀孝行章第十「五者備矣、然後能事親」の注解)

この五つがみんなそろえば、孝行ということが成立せずにはおかぬ。

さて、右の諸例において、わたくしはそれぞれ適當な意譯を試みたけれど、もしもこの「不……那甚麼」を直譯するなら、「……しないで(でなければ)何だ」という、翻譯臭をまとうた表現である(「那」は助字)。それは結局、この表現の中間におかれる事からを強調することになり、句末の「甚麼」を省いた一種の反語形式とも、ほとんど差

違のない表現である。實際にも、白話碑はもちろん典章中にはそうした表現もしばしば見られる。

這的每更這般道來也。沒體例的勾當做呵。他每更不怕那。(典章五、臺綱、立御史臺官)

これらのものが、また「このようにいわれた」といつて、無法なことをすれば、かれらは痛いめにあわなくてか。

ところで、二種の表現の歸するところが同じいことは容易に理解されても、なにゆえ二つの表現が共存するのか、わたくしは久しい以前からこのことに疑念をいだいていた。最近、岩村忍教授より教えられ、きわめて数少い現存の蒙漢對譯碑文(蒙古文は八思巴字で表す)中に、幸いこの表現が含まれていることを知った。いま Erich Haensch 氏の “Sleuergerechte der chinesischen Klöster unter der Mongolenherrschaft” (1940) に引用された、氏のローマナイズによる對照文から「他每不怕那甚麼」に附せられた蒙古文を挙げよう。

mud basa 'ulu'u ayuhun — おそれないでよからうか(おそれよ)の意。

右に據るかぎり、蒙古語の原文には「甚麼」に相當する

語が見えぬ。とすれば、直譯體における「甚麼」はいずれも原文のもつ強い語氣を示すため特に附加されたものであろうか。それとも、もともと蒙古語にもまつたく同じ表現があるため、たまたま「甚麼」にあたることばのない右の場合の譯文にも、「甚麼」を譯しこんだのであろうか。元典章には、さらにつぎのような表現も見られる。

如今。完澤。您做我的言語。省會道與者。鋪馬的勾當用心者。三兩裝勾當呵。着一个使臣來呵。徧不了也甚麼。(典章三十六、兵部、納錢物起站船)

さて、ウルゼートよ。そなたはわたしの言葉として、知らせ傳えよ、「鋪馬―驛傳のことは、注意せよ。二三件の任務なら、一人の使臣に來させた場合、まかないきれなくてどうする。」この場合は、意味が逆轉するため「甚麼」を省略するところが許されない。

ところで、元代白話における類似的表現は、現代語と同じく、「那」を介せずに直接「做甚麼」を付加する。

姐姐。夜深了。不睡做甚麼。(白仁甫「東牆記」第一折梅香白)

お嬢さま。夜がふけました。やすまれなくてはいいけません。

當夜五更。師姑床上睡着。有人將師姑驚覺。想是夫張記住。以此道。明也。不做生活去呵。却來睡則麼。(典章四十二、刑部、殺死盜姦婦姦夫)

その夜の五更に、師姑がベッドでねていると、誰かが師姑をよびました。夫の張記住だともい、それでいつた「夜があけますよ。仕事にゆかず、ねに來てどうするの」(則麼||做甚麼)。

ただし、右の第一例の如く、その動作狀態に否定形が用いられるケースは、むしろきわめて少ない。直譯體における「不……那甚麼」という表現が、いよいよ文字どおりの直譯をおもわせるゆえんである。

## 肚 皮

白話の文學作品に當然現われるべくして現われないことばの随一は、「わいろ」を意味する「肚皮」であろう。これは通常つぎのごとく使用せられる。

近間。開讀聖旨詔赦差出去底使臣每。更不揀甚麼大小勾當裏使出去的人每。到外頭城子裏官人每根底。要肚皮。多喫祇應。(典章六、臺綱、使臣要肚皮)

近ごろ、聖旨や詔赦を傳達(開讀はよみあげること)に地方へ派遣される使臣たちや、大小いかなる公務を問わず地方に使いする人たちは、行省管轄区域内の都市の官人から、わいろをとり、

よぶんに響應をくらう。

在先求仕人員。這壁那壁使錢與肚皮。勾當裏行有來。

(典章十、吏部、不赴任官員)

以前は仕官を求める人が、あちらこちらへ金を使いわいろをあ  
たえて(就職し)、公務を執行した。

白話の「肚皮」がなにゆえわいろを指して使用せられる  
かについて、楊聯陞教授は、腰(腹に近接する)に財布を  
吊るすことをその理由とされる。 (“Marginalia to The  
Yuan-Tien-Chang” — Harvard Journal of Asiatic  
Studies, Vol. 19 No. 1~2, 1956) しかし、筆者はこの  
もつてまわつた説には、どうも賛成しかねる。

まず、「肚皮」という白話は、むしろ現代語の「肚子」、  
すなわち「はら」そのものを指すとみるべきである。

盒子裏藏的是儲君。我肚皮裏懷的是鬼胎。(作者不明)

「抱粧盒」第二折(牧羊關)

箱の中にかくるはもうけの君、わが腹にいだくはあらぬかげ。

在後捉到卓世雄男卓羅兒。用麻索縛住双手双脚。腦後  
打死。次用尖刀破開肚皮。取出心肝肺脾。……(典章四

十一、刑部、禁探生祭鬼)

その後、卓世雄のむすこ卓羅兒をとらえ、麻なわで両手兩足を  
しばつて、後頭部を打つて殺し、次いで切りだして腹を開いてぞ  
うもつを取り出し……。

もつとも、右の例だけでは「腹の皮」の意に解しても通  
ずるが、「元朝祕史」では「肚皮」(客額里—Kegel)が  
つねに腹を指して使用せられる。

夜(毎) 每 明 黃 人 房 的 天 窓 門  
雪 你 惕 不 里 超 堅 失 刺 古 温 格 命 額 魯 格 朶

額 的 明 裏 入 着 肚 皮 我 的 摩 着  
脫 合 因 格 格 額 兒 幹 羅 周 客 額 里 米 訥 必 里 周

明 他 的 肚 皮 裏 我 的 透 有 來  
格 格 延 亦 訥 客 額 里 突 兒 米 訥 升 格 古 不 列 額

(卷一)

毎夜、黃白いろの人が、いえ(テント)の煙出しの上の明るい  
ところから入り、わたしの腹をさすり、彼のひかりが、わたしの  
腹にさしこんだ。

とすれば、内藏する物をも含めた「腹」から直ちに「わ  
いろ」が聯想されたとしても、少しも異とするに足りぬだ  
ろう。われわれの國語をひきあいに出すのは必ずしも妥當  
でないが、周知のごとく、「腹を肥やす」とは食物を中心  
にした物質慾の充足を意味する。さらに、上に掲げた典章

の例にも、「多喫祇應」が附帶することも、「肚皮」に對するこの見解を支えてくれよう。つとに同じ意見をいだかれる岩村教授は、「肚皮」は蒙古語“ideg”（食べるもの・わいろ）を意譯したものと主張される。この語に關しては、對譯の蒙古語原文が現存せぬので、なんともいえないけれど、筆者も、「腹」を意味する“Kegeli”（元朝秘史の客額里）が同時に「わいろ」を意味したのではなく、「わいろ」を意味する語は別にあつたとおもう。

それでは、なぜ「肚皮」というような語で翻譯したのか。それについては、やや冒險に屬するが、筆者はつぎの如く考える。元典章には、しばしば「要肚皮」を「覲面皮」（あいての顔をたてる意）と對して使う事實がある。

係官錢糧造作物料内。克落侵盜的。移易借貸的。覲面皮要肚皮。教百姓每生受。不公不法的官吏每根底。監察每肅政廉訪司官人每。用心依體例體察的每根底。添與他每名分。……（典章五、臺綱、整治臺綱）

政府關係の金錢・食糧・建設資材のうちより、くすね盗んだり、移動貸借したり、顔をきかせわいろをとつて人民たちを苦しめたりする、不正不法の官吏らを、監察ら・肅政廉訪司の官人らで注意して法規どおり體察するものらに、かれらの名義（取締ま

るための權限職名）をあたえ……

また、蒙古語の原文をば直譯體ならぬ漢文史牘體に譯出したものにも、ほぼ同じ現象が指摘される。

差去官并各處刷馬官吏人等。不得因而抵換馬疋。及取收錢物。看順面情。（大元馬政記）

派遣せられた官ならびに各地の馬匹あらためる官吏らは、ついでに馬匹を交換したり、金錢物品をうけたり、顔を立てたりなどしてはならぬ。

知而不舉。或看覲面情。受錢物酒食不舉者。量其取受輕重。斷罪追錢。並行罷去。（大元海運記、上）

知りながら行なわなかつたり、顔をたてたり金錢物品・酒食をうけたりして行なわぬものは、收賄の輕重をはかつて斷罪賠償せしめ、同時に罷免する。

そこに見られる「看順（覲）面情」はまさに「看面皮」に、「取受錢物（酒食）」は「要肚皮」に相當するであらう。ところで、此の「覲面皮」の方は、元曲などにもまれではあるが、

我若不覲大人面皮。直贏的他與我跟隨。（王實甫作「麗春堂」第二折滿庭芳）

もしも閣下のおかおを立てぬのなら、やつをばわが後に従わせるまで勝つものを。



と見えるし、同じ意味の「看……面」「看……面皮」「看……面上」という表現に至つては、かなり頻繁に使用されている。

我若不看你那亡過的父親面呵。喚宅院裡人來打壞了你。

（白仁甫作「梅香」第三折夫人白）

もしあんたの亡き父御の顔を立てぬのなら、邸のものを呼んで、あんたを打ちのめしたでしよう。

看史進面皮饒了他罷。（作者不明「還牢末」第二折史進白）

史進のかおに免じてやつを許してくれ。

小姐。怎生看老漢的面上饒了他這性命。（楊顯之作「瀟湘雨」第四折李老旦白）

お嬢さま、なんとかこのわしに免じてやつをかんべんしてやつてくだされ。

そこで想像されるのは、すでに一般白話として存在する「着面皮」の「面皮」に暗示され、「肚皮」を「わいろ」に當てたのではないか、ということである。相對する二つの表現は、韻律的な對應こそしないが、なかなか對照の妙を得ている。

Kan mian-pi : yau (yu) du-pi

根底・根前

まず、その本義はさておき、白話としての「根底」は、おそらく「根前」とともに「かがと」「あしもと」を意味したのであろう。だから、元曲などにおいては、二語とも「根」が「跟」に作ることもあり、すでにやや引申した「そば・もと」をも意味して使われる。

我這裏急慌忙那身起。大走到向他根底。（作者不明「爭報恩」第四折側磚兒白）

おいらの方はあわてて身をはこび、大またで（？）かれのそばに歩みよる（那〓那、身起〓身已〓身體）。

可又早七留七力來到我跟底。（關漢卿作「謝天香」第三折

醉太平）

また早くもするするとわたしの側へやつて來た。

恰纔我在軍師根前說降唐。（作者不明「小尉遲」第四折正

末旦白）

いましがた、わしは軍師のところまで唐への降服を申しいたばつかり。

一騎馬騰到跟前。（尚仲賢作「單鞭奪槊」第四折刮地風）

一りの騎馬武者がそばにかけよぬ。

我根前添了一个孩兒。（張國寶作「合汗衫」第三折旦兒白）  
わたし（のところ）に一人子どもができました。

ちなみに、これらの「根底」「根前」は、また現代語の「那裏」「這裏」にも置きかえうる。

ところで、宋元期の俗語には、これらの二語と相似た用法を示すものとして「行」(hang)もある。

哥哥也你便有甚險今朝到我行。(作者不明「灰闌記」第一折天下樂)

あにさんえ、どのつらさげて今日あたしのところへお見えだえ。

他道小梅行必定是个厮兒胎。(武漢臣作「老生兒」第一折

混江龍)

かれの話では、小梅のところはきつと男(の胎兒)だと。

你對誰行大叫高呼。(孟漢卿作「魔合羅」第三折府尹白)

そちは誰にむかつて大聲出してわめいている。

このように、一般白話における「根底」は「根前」「行」とともに位置を示す名詞で「もと・そば」を意味し、したがってこれらの語は在・到・向・對などという存在・方向を示す介詞(前置詞)を要求しがちである。ということとは、孤立語に近い中國語では、そういう介詞の機能がこれらの語に内蔵されていることをも意味し、かくて、名詞・代名詞の語尾變化によつて格を區別する蒙古語の、ある種

の格を示す語助として、利用されるに至つたのである。

そこで、元典章では最も代表的な「根底」の用法を、まず實例について検討してみよう。

管軍官人每根底、軍人每根底、管城子達魯花赤官人每根底、過往使臣每根底、宣諭的聖旨。……更沒俺每的明白聖旨。推稱諸投下。先生每根底、不揀甚麼休索要者。……更俗人每。先生每根底、休理問者。(整屋重陽萬壽宮聖旨碑、「元代白話碑集錄」收、Erich Haenisch氏の書によつて訂正する)

管軍官ら(に)、軍人ら(に)、都市を管轄するダルガチ官ら(に)、往來する使臣らに宣諭された聖旨。……また、朕の確かな聖旨がなく、いろいろの投下の名をかたつて、道士たちからいかなるものも取つてはならぬ。……また、俗人らは道士たちを取調べてはならぬ。

蠻子田地裏。看守五河縣的張千戶小名的受宣的官人。

則那縣裏的官人吳縣令。他的二十一件無體例行來的勾當尋出來呵。這張千戶與本縣裏姓崔的達魯花赤。又一箇姓陳的令史每的頭兒。一處做一心。這吳縣令根底、謊告著呵。那裏的官人每。這每根底、監著問底其間裏。這張千戶姓趙的蔡子根底、與了三定鈔肚皮。那箇根底說。晚夕。吳

縣尹睡着の時分。你教我知者。我殺那箇。殺了呵。他自抹死也。麼道你官人每根底說者。兩箇這般商量了呵。晚夕。那吳縣令睡着呵。那蔡子睡着也。麼道來說呵。這張千戶起去了。著刀子把那吳縣令抹死了來。俺商量得。這張千戶根底敲了。他的家緣斷沒了。斷沒了的。於内一半。那殺的人媳婦孩兒每根底與呵。怎生。(典章四十二、刑部、倚勢抹死縣尹)

蠻子—舊南宋治下の民—の地域で、五河縣をあずかる張千戸という名の受宣の官人は、ほかならぬその縣廳の官人吳縣令が、彼(張千戸)の、二十一の不法行爲をさがし出したので、この張千戸が、該縣廳の崔という姓のダルガチ—蒙古側の長官—および陳という姓の、令史らの首領と、一しよに心をあわせて、この吳縣令を誣告したので、その官人らがこれらのもの(張千戸らを指す)を留置して取調べている時に、この張千戸は趙という姓の看守に三錠の紙幣のわいろを與えて、そのおとこにいった、「夜、吳縣令がねむつたら、おまえはわしにしろせよ。わしは彼を殺す。殺したら、『彼は自殺しました』とおまえが官人らにいえ。」兩人はこのように相談したので、夜、かの吳縣令がねむると、かの看守が「ねむりました」といいに來たので、この張千戸が起きてゆき、刀でかの吳縣令を斬り殺した。われわれ(中書省官)は相談して、この張千戸を敲殺刑にし、彼の財産を沒收處分にし、沒收處分にしたもののうち半分は、かの殺された人の妻と子ども

に與えたらいかがでしょう。

わたくしはわざわざ例文二條を挙げたけれど、實は第一の例文だけで「根底」の用法は盡くされている。すなわち、それは蒙古語における三つの格を示す語助として用いられる。右の第一例の聖旨碑にも、八思巴字による蒙古文が現存するので、ふたたび Erich Haenisch 氏がローマナイズした對照文より、原語の格を示す語尾を拾つて、それぞれ對應させておく。

(a) 與格 (……に、……に對し) -a, -e, -da.

(b) 尊格 (……から) -dača

(c) 對格 (……を) -i.

このうち、最もひんばんに使用せられるのは(a)(b)で、半ば中國語の表現と化して、介詞を伴うことも稀にはある。

俺毎的明降聖旨與呵。推稱諸色投下。於先生每根底。

不揀甚麼休索者。(典章三十三、禮部、宮觀不得安下)

朕の明降せる聖旨があたえてあるから、諸種の投下だといつわり、道士たちから、なにであろうと取つてはならぬ。

それに反して、(c)の用例は意外に少なく、大體において聖旨の場合などが多い。

前者。金衣服根底。交俺商量者。麼道聖旨有來。(典章五十八、工部、禁治諸色銷金)

さきごろ、黄金の衣裳をわれわれに相談させよ、という聖旨があった。

哈兒弓箭每根底。交與探馬赤每呵。不中。漢兒蠻子官人每。休交管者。弓根底。恐怕壞了麼道呵。蒙古軍每根底與者。(典章三十五、兵部、達魯花赤提調軍器庫)

ハル―蒙古語で武器をいう―弓矢をタマチら―蒙古軍の一種―に與えさせるのは、いけない。漢人・蠻子の官人は關係させるな。弓をこわされるおそれがあるから、蒙古兵らに與えよ。

この種の用法が意外に少ないのは、ふつうそれを「將」や「把」を用いる中國語の表現に換えてしまふためだとおもわれる。それは、一つにはつぎの如き紛らわしい表現を防止するためであらう。

如今那般陰陽理會得人根底。駙馬大王根底。不揀誰根底。一迷地休交行。(典章三十二、禮部、陰陽法師)

いま、そのような陰陽術の心得ある人をば、駙馬・親王のところへは、誰のところへも、ひとえにゆかせぬよう。

しかし、一方で「將」を用いる中國語的表現にかえながら、なお「根底」を伴う例も、稀には指摘せられる。

他姓張。是養的兒。因着胡家的氣力裏做到參政的名分有。却將他胡家的親子胡總管根底殺了有。(典章四十一、刑部、胡參政殺弟)

彼は本姓が張で、養子である。胡家の力によつて參政の地位になれたのに、彼の胡家の實子胡總管を殺した。

李明秀名字的和尚(將)魏德温名字俗人殿打的上頭。路縣官俺根底不商量。一面詞將李明秀和尚根底打了二十七下。(典章新集、刑部、路縣官擅斷和尚要罪過)

李明秀という名の僧が、魏德温という名の俗人をなぐつたというので、路と縣の官がわれわれ(僧侶)に相談せずに、一方的な申し出で僧李明秀を二十七の棒たたきにした。

ところで、このように蒙古語の三つの格を示す語助として同じ「根底」が使用せられるのはなぜかといえ、三つの格は要するに行爲・處置を加える對象であるという點で一致する、からである。したがつて、蔡美彪氏が、

先來欽奉皇帝聖旨節文該。漢兒國土裏。不揀那個州城裏達魯花赤并長官。管匠人底達魯花赤每。這聖旨文字裏。和尚根底寺。也立喬大師根底。胡木刺。先生根底。觀院。達失蠻根底。蜜昔吉。那的每引頭兒拜天底人。不得俗人搔擾。不揀甚麼差發休交出者。(鳳翔長春觀公據碑——「元代白話

## 碑集錄「收」

に注して、この「根底」は特別で領格（屬於にあたる）だとされるのは誤りであろう。蒙古語の與格はまた方位格（……について、において）をも含むといわれ、右の例における「根底」はそれにあたり、たとえば「和尚根底寺」は「僧については寺」を意味するのではない。

この「根底」の直譯體における語助としての用法は、「孝經直解」などにあつても變りはない。ただし、「元朝秘史」に至ると事情は一變し、そこでは元曲などもしばしば介詞を伴わずに用いられる白話「行」(hang)が、全面的に「根底」の代りをつとめる。だが、その「行」も、實はすでに典章でつぎのごとくきわめて稀に用いられている。

忽行文書。這飛禽行休打捕者。好生禁了者。（典章三八、兵部、禁打捕禿鷲）

そらたちは文書をまわし、この鳥類を捕らぬよう、しかと禁ぜよ。

……麼道奏呵。那般者。教行文書者。麼道聖旨了也。麼道俺行與文書來有。（典章四十九、刑部、處斷盜賊新例）

「……と奏上したところ、『そのようにせよ、文書を廻させよ』との聖旨があつた」と、われわれに文書をよこしている。

つぎに、「根前」もまれではあるが、格を示す語助として、「根底」と同じ用途に供せられている。

不揀甚麼民戸裏。畏吾兒每。爺的錢物爭競自（着？）厮打厮爭的多上頭。今後他的孩兒每根前與分子呵。爺與來的要有。爺的言語休違者。（典章十九、戸部、爺的錢物要分子）

いずれの民戸にあつても、ウィグルたちで、父の金錢財物（遺産）を競争して、たがいに分けまることが多いため、今後は、彼の子どもたちに分けまを與える場合、父が與えたものを取るよう。父のことは（遺言）には違背するな。

這裏察出來的馬牛。上位奏過。禿禿哈根前吩咐有。

（典章二十一、戸部、察出來馬牛米糧數賣做鈔）

ここ（腹裏——中書省直轄區域）で摘發した牛馬は、おかみに奏上してトトハにあずけてある。

亦黑迷失的伴當孟左丞小名的人。騎着五箇鋪馬。爲奏事去了上頭。沿途走死站馬有。他根前要了文書。他的沒體例的奏將來。（典章三十六、兵部、走死鋪馬交陪）

エヘミシの同僚である孟左丞という名の人、五匹の驛馬に乗つて、奏事にでかけたために、途中で驛馬を死なせた。彼から文書を取り、彼の無法なことを奏上して來た。

だが、かような「根前」の使用は要するに例外的であ

り、典章ではやはり「根底」が壓倒的に多い。そのことは、白話文學における「根底」の使用に影響を與えぬはずがない。すなわち、元曲に見られる「根底」は、前掲の例をも含めて僅か數例にすぎないし、いま更たてて注意すると、いずれも韻文中の、しかも句末に使用せられていることに氣づかれる。ということは、それらが押韻のつごうでやむなく「根前」の代りに使用せられたことを意味しよう。このように、もはや輕々しく「根底」を使わぬのは、文學作家の潔癖を物語るものといえよう。

### 根脚・根脚裏

唐の李咸用の「小松歌」という詩（披沙集）には、  
庭閑土瘦根、脚寧。風搖雨拂精神醒。

とあり、その「根脚」は地上にはう松の根を指すようである。だが、これなどはむしろ例外で、語感からして正常な文言となりえないこの語は、まず白話としてあつたといつた方がよからう。「朱子語類」十三に、

且須立箇粗底根脚。却正好看細處工夫。

まあとにかく大ざっぱな基礎をうち立てることが必要、そうすれば細部の研究がやりやすい。

とあるように、抽象的には「基礎・根底」を意味するともに、具體的には「足・足もと」を意味したのであろう。元曲「王粲登樓」（鄭德輝作）の第二折で蒯越が王粲をからかうくだりの旁白は、

我盤盤他的跟脚。把文溜他一溜。

やつ足のもとにまづわり、文學のことでなぶつてやろう。

とある、その「跟脚」の少なくとも表面の意味はそのようにおもわれる。しかし、やがてこの語は法制用語に入り、根底という本義からその内容がまた別な方向で具體的に局限され、官途に任用される上の條件資格としての「出身」を指す。これについては、すでに張相氏が、元の張可久の散曲「水仙子」の、

淡文章不到紫薇郎。小根脚難登白玉堂。

よわい文章じゃ紫薇郎（大臣）にもなれぬ、けちな出身じゃ白玉堂（政廳）にも登りかねる。

などを掲げて例證する（詩詞曲語辭滙釋）。わたくしは、前掲の「王粲登樓」の例も、裏面の意味は王粲の文學者としての経歴、實力を調べることであらうとおもう。それはともかく、張相氏の引くのはすべて文學作品中の例だから、こ

こには典章によつて補うとともに、この語のもつ内容をより正確に把握するうえの参考に供しよう。

據隨處告叙用官員。今後先於本處官司。具入仕根脚・歷任月日・停職緣由。陳告勘當。別無詐冒。申覆本路官司。更爲照勘相應。(典章十、吏部、告叙本路保申)

各處における叙用申告の官吏については、今後、先ず當該官廳で、仕官資格・歷任月日・停職理由をそろえて、陳告照合してもらい、記載事項に不正がなければ、當該路の官廳に申告、さらに照合するのが妥當である。

各投下多是漢兒契丹女眞做蒙古人的名字充達魯花赤。今後委付蒙古人者。若無呵。於有根脚色目人内選用。

(典章九、吏部、有姓達魯花赤革去)

各投下―王族・功臣の采邑―では大い漢人・契丹人・女眞人を、蒙古人の名にしたててダルガチ―蒙古側長官―に任用するが、今後は蒙古人に委任せよ。もし(蒙古人に適任者が)なければ、仕官資格のある色目人―西方系の外國人―の中から、選用すること。

更有賺了名分嫌遠不去赴任的。做根脚再求仕的也有。

(典章新集、吏部、重惜名爵)

さらに、名義をかせぎながら、遠方をきらつて赴任しなかつたものが、それを履歴として仕官を求めるものもある。

さらに、その「根脚」の具體的な内容としては、元典章に収める申告書或いは履歴書の書式中に、つぎの如く見えている。

本官根脚。原係是何出身。(原注云。謂承襲・承繼・蔭叙・吏員・儒業・軍功等)直云入仕緣由。……

その官吏の履歴(仕官資格)は、もと何の出身であるか。(注文省略)、すぐつづけて仕官理由をのべる。

さらに、この語は入矢義高教授の教示によれば一種の修飾語としても使用せられる。

擴廓居軍中久。樂恣縱無檢束。居朝怏怏不樂。朝士往往輕之。謂其非根脚官人。(庚申外史、下)

擴廓は久しく軍中であつて、自由奔放の生活を楽しんでいたので、朝廷にあつては怏怏として樂しまず、同僚はしばしば彼を輕蔑した。彼が元からの官人でない(軍人出身を指す)からというのである。

さて、「根脚」という語は、右のごとくまず「足もと」

「基礎」という原義より、「出身」「出仕資格」「履歴」の意に轉ずるが、それらは要するにお白話の用法に屬する。ところが、直譯體の部分には、その同じ「根脚」が「裏」字を伴うて副詞化し、「本來」「起初」などとほと

んど變りなく使用せられる。

金銀は鈔的本有。根脚裏立鈔法時節。只交各路裏存留着做鈔本有。麼道立定來。(典章二十、戸部、存留鈔本)

金銀は紙幣の本である。はじめ幣制を定めた時には、『各路に(金銀を)とどめて、鈔本―準備金―とさせよ』と定められた。

這の每根脚裏は匠人有。阿里海牙使見識。交軍數目裏入去來。(典章三十四、兵部、造作軍人休教出征)

これらは、もともと匠人であるのを、アリハイヤがわる知慧をはたかせて、軍の要員中に入れさせた。

この用法はまた、かの「孝經直解」の中にも指摘される。

因這般呵。聖人行的教道・政事。不須嚴肅呵。自家成有。是他根脚裏元有那个孝順的心來。(聖治章第九「聖人之教、不肅而成、其政不嚴而治、其所因者本也」の注解)

こんな次第だから、聖人が行なう教化・政治は、必ずしも嚴肅にやらなくても、おのずと成功する。かれには初めからその孝養の心があつたから。

この種の「根脚裏」が直譯體の部分にのみ見えるのは、蒙古語の原文で同一の語が用いられているためであらうか。いま、資料的にはそれを知ることができない。

## 其 間

いうまでもなく、この語は本來文言として存し、「其」は指示詞としての任務をはたしつつ、二字の用法は専ら空間的に限定されている。

有竹一頃餘。喬木上參天。杜鵑暮春至。哀哀叫其間。

(杜甫「杜鵑」詩)

住近湓江地低濕。黃蘆苦竹遶宅生。其間、旦暮聞何物。

杜鵑啼血猿哀鳴。(白居易「琵琶引」)

我向其間、泛葉。(趙長卿「臨江仙」詞)

ところが、この語が白話に用いられると、いつしか「其」が指示詞としての使命を失い、「其間」二字が「裏頭」と同じ意味をもち、あらたに白話の指示詞「那」「這」を伴いさえる。

況弊寺其間多有寮舍。(董西廂、一、吳音子)

まして當寺のうちには宿舎があまつてござる。

火急開絨仔細讀。元來是一首新詩。披味。那其間意思。

知你獲青紫。(同、四、安公子賺)

急ぎ開封仔細によめば、これぞ新作の詩一首。うちなる意味を讀みとりて、知るは貴官に就かれしおもき。



十一・二世紀の交に作られた語り物「董西廂」では、「其間」が右の例をあわせておよそ十見され、うち指示詞を伴わぬものには、いくらか文言に傾くものも含まれるようだが、空間的用法をもつ點では、少なくともみな一致している。ところが、それより一世紀あまり降つた元朝に至ると、文學作品に關する限り、

看喜怒其間觀箇意兒。(王實甫作「西廂記」第七折青歌兒)  
さて、喜怒のいずれや書中のおもむき見ん。

我只見前山掩映蒼蒼樹。那其間必有埋伏。(鄭廷玉作「楚昭公」第三折耍孩兒)

ゆくての山に見えかくる、青々とした木の茂み、あそこにはきつと伏勢があろ。

他意兒難提起。這其間就裡我自知。(高則誠作「琵琶記」四、太師引)

あの人のころはいいかねる、その事情はあたしにわかる。のような空間的用法の「其間」は急激に減少する。他のおびたらしい用例は、みな新たに時間的用法を獲得し、しかも、常に指示詞「這」「那」のいずれかを伴いつつ、「這其間」は「いま」、「那其間」は「かの時」を意味して、小説・戯曲中に習用される。このように「其間」が單に「と

き」を意味して用いられるからには、「……的其間」という表現があつてもよいのに、それには「時節」「時分」「時候」などが用いられ、「其間」はふしぎにも「這其間」「那其間」の形でしか現われないのである。

その同じ「其間」が元典章に至ると、同じ時代のもとにありながら、また異なる用法を呈する。まず、時間的用法としては、「這其間」「那其間」はもちろんのこと、前記の「……的其間」という形も、ここではしばしば見うけられる。

行省首領官令史宣使勾當的其間。被廉訪司呼喚着問有。  
(典章六、臺綱、整治廉訪司)

行省の首領官・令史・宣使が公務執行のとき、廉訪司に呼ばれて取り調べられる。

那言語轉來俺根底呵。有體例呵。依着行。却無體例的。委付着俺的其間。怎生不題說的。(典章四、朝綱、奏事經由中書省)

そのおことば(中書省を経ずに直接許可を得た聖旨)がわれわれ(中書省官)のもとに轉送された際、法規判例のある場合は、そのとおりに施行しますが、法規判例のないものが、われわれに委任された時には、どうして、申しあげずにおけましかうか。

この場合、時として「的」字が省略されると、特に文言のそれと誤認され易く、句讀を誤るおそれもある。

今已後支俸呵。月盡其間交與者。（典章十五、戸部、告假事故條例）

今後俸給を支給するには、月の終りに支給させよ。

また、同じ時間的用法ながら、このように一つのポイントを指す「其間」に對し、一つの廣がりを示す、すなわち、邦譯すれば「あいだ」を意味する「其間」も指摘される。

樞密院家五衛萬戸千戸百戸官人毎。十年其間裏。軍人每根底。二十萬定鈔齊斂來也者。（典章三十四、兵部、禁軍齊斂錢物）

樞密院五衛の萬戸・千戸・百戸の官人らは、十年の間に、軍人たちから、二十萬錠はまきあげたでしよう。

以上の「其間」はすべて時間的用法に屬するが、同じ構文でも、つぎの用例はもはや空間的用法との中間を浮游する、かとおもわれる。

今後内外大小一切軍務勾當。欽依世祖皇帝定制。諸王駙馬各衙門官人每近侍人員不干礙的。不揀是誰。越驀着

樞密院。他每的勾當其間侵入。休去奏者。（典章三十四、兵部、拯治軍人條畫）

今後、内外大小すべての軍事任務は、世祖皇帝の掟に欽依し、諸王・駙馬關係各官廳の官人ら・近侍官らの、（軍務に）關係ないものは、誰であろうとも、樞密院をとびこえて、かれらの事務のなかにさし出て上奏してはならぬ。

そして、「其間」はやがて元典章の中でも、完全に空間的な用法をもつ。ただし、それは主として「自其間」「自己其間」という典章特有の表現においてである。

僧俗相犯重刑者。與管民官一處問了。是做重罪過來。招伏了呵。分付管民官。輕罪過的。一處斷者。和尚自己其間做罪過的。則教和尚每頭目斷者。（典章三十九、刑部、僧人自犯重刑）

僧・俗の間で重大な罪を犯したものは、管民官と一しよに取り調べ、重罪を犯したものなら、白狀してから管民官にわたし、輕罪のものは、一しよに裁判せよ。僧侶自身の間で罪を犯したものは、僧侶たちの長だけに裁判させよ（則し口）。

蒙古軍人自其間裏相告的勾當有呵。院官人每問者。其餘軍民相犯。不揀甚麼勾當有呵。約會著問者。（典章五十三、刑部、軍民詞訟約會）

蒙古軍人同志で告訴事件がおきれば、（樞密）院官らが取り調

べよ。そのほか、軍民双方間の犯罪で、なにことが起ころうとも、(管軍官と管民官が) 約會して取り調べよ。

ところで、直譯體における「其間」がこのように一般白話とやや異なる用法を示す理由は、きわめて簡單である。

ふたたび Erich Haenisch 氏の書に引かれる、現存の蒙古對照文によれば、「其間裏」に對應する蒙古語は *jaura* で、原語自體がすでに時間空間の兩用に供せられ、そのため、あたかも同じ用法をもつ「其間」が忠實なる譯語として選ばれたからである。したがって、同じく「とき」を意味しながらも、たとえば原語が單に時間的用法しかもたない「*bugui*」なら、たとえば「大都有的時分寫來」(大都にいた時に書いた——前掲書 p. 60~61) の如く「時分」と譯し、原語が「*jaura*」なら「其間」と譯するという嚴密さが、通譯や翻譯官(通事・譯史)の間にいつしか約束されていたと想像されるのである。

### ……的一般

「一般」そのものはいうまでもなく「一樣」と同義だが、宋元期にはむしろこの方が廣く行なわれていた。そのことに問題はないのであるが、直譯體には「……的一般」とい

う表現が、斷定斷言を避けて「……のようだ」という意味で時おり出現する。

江南來的官員客旅軍人。並諸色人每。就江南百姓人家的女孩兒。並無男兒底婦人根脚(衍?)底。做媳婦來將來。卻行瞞昧。賣與諸人爲驅。不便當的一般。(典章十八、戶部、驅口不娶良人)

江南に來た官員・旅商人・軍人および諸種の人たちが、江南の人民の家のむすめ、および夫のない女を、妻としてつれてゆきながら、だまして人人の奴隸に賣るのは、不つごうにおもわれる。

如今官人每帶着大牌子金牌銀牌多底一般。……品從官人。合與甚牌子明白了呵。不合與牌子底。追收入官。這般呵。宜底一般。(典章二十九、禮部、追收牌面)

ただ今、官人らは大牌子・金牌・銀牌をおびているのが多いようです。……品從の官人は、何の牌子をあたえるべきかはつきりさせ(れば)、不當に牌子を與えていたのは、とりもどして官に収める、このようにすればよろしいようです。

孔夫子加封名號。翰林集賢院官人他每的言語是的一般。(曲阜加封孔子聖旨致祭碑——「元代白話碑集錄」收)

孔子の加封名號は、翰林集賢院の官人らの申しますのが、もつともなようにおもわれます。

這般小心常常怕的一般呵。便似在深水薄水上行。則怕

有失錯的一般有着。(孝經直解、諸侯章第三「戰々兢々、如臨深淵、如履薄氷」の注解)

このように氣をつけていつも恐れるようにしてれば、ちょうど、深い水・うすい氷のころをゆき、ただ失策をしまいかとおそれるようなものである。

這三件兒歹勾當不去了呵。每日家怎生般飲食奉養。雖恁地呵。也是不孝順的一般。(同、紀孝行章第十「三者不除、雖日用三牲之養、猶爲不孝也」の注解)

この三つの悪いことをとり去らねば、毎日どのように飲食のせわをしても、こんなにしても、やはり親不孝だとおもわれる。

一般白話においては、ある事態を類似的の事態にたとえて「便似……一般(似的)」ということはあるが、右のごとく斷言をさせていう場合に使用せられることは見ないようだし、少なくとも「的」字を伴う用例は絶無である。これも典章直譯體に獨特の表現であるとおもわれる。

## 追記

(1) 五十二頁の下段で、筆者が「太元海運記」なればこそ云云といたしたのは、説明不足のそりを免れまい。筆者の直感では、「太元海運記」にしろ、「太元馬政記」にしろ、「經世大典」中の文章は、おそらくぶつつけに書かれた文言ではなく、もと蒙古文を直譯した白話文を、さらに文言に翻譯したもので

ある、少なくともそういう資料に據ったものが重要部分を占めている、と想像されるからである。このことは、それらを元典章の文章と比較することによって、容易に了解されるはずである。

(2) 無法な行爲をなした場合、「おそれないでどうする」という「不怕那甚麼」は、確かに奇妙な表現である。その奇妙さは「怕」字の用法がやや尋常でないことにも因る。ここでは「おそれる」が、「おそろしい思いをする」ことから、より具體的には、「法の恐ろしさを知る」「痛めにあう」ということまで意味しよう。「罪を犯せば、法の恐ろしさを知らずにはすまぬぞ」というわけである。ついでに、これは引用するほどでないかもしれぬが、「孝經直解」三才章第七の「示之以好惡、而民知禁」の注解に、

好的歹的勾當。先教知道呵。百姓自家怕也。

よいこと、わるいことを先に知らせておけば、民は自分でひとりでにおそれるのである(「有」は「者」の誤りであろう)。

とあるのは、多少の参考になるだろう。

(一九六一・二・二〇)

**Notes on the Language of the Yüan-tien-chang 元典章 (I)**

**—The Yüan Vulgar Language in the Chinese Metaphrased  
from Mongolian—**

*Kenji Tanaka*

Due to peculiar requirement for metaphrasing Mongolian verbatim into Chinese, a language belonging to another family, the vulgarism found in the Chinese metaphrased from Mongolian in the Yüan-tien-chang is different in expression and usage from the vulgar Chinese in general of the Yüan period. The author discusses differences in usage of the following words and phrases; *Pu*……*nè shemmè* 不……那甚麼, ……*tè yipan* ……的一般, *kenti* 根底, *kench'ien* 根前, *kenkiao* 根脚, *k'ikien* 其間, *tup'i* 肚皮.